
男の子の格好と声のお仕事

柚唄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男の子の格好と声のお仕事

【Zコード】

Z8098T

【作者名】

柚原

【あらすじ】

性別不明の覆面声優として、男装して、全寮制男子校通つて、ルームメイトがイケメン（これまた声優）つていうなんか少女漫画みたいな生活送つてます。しかし一つおいしくない話が。

僕、太つてます つまりデブ。一年の時よりは大分痩せたけど、まだ！ 大体、よく顔整つてる子が男装して男の子のフリつてあるけど、バレるに決まってるでしょ？ デブだとバレないんだよ！ ……言つて少し、虚しいかもしれない。そんな、そんな生活、見てみませんか？

「ウと菖蒲谷太郎（前書き）

プロローグです。短いです。
あらすじにも書きましたが、ヒロインはテラップです。

「コウと菖蒲谷太郎

紙をそーっと捲る。音を立てたらマイクに拾われて監督に怒られてしまふから。

水無の、次の台詞。

『うちには無理やな。霜はビリビリ思ひつん?』

僕の番！

『あたしは、できると思ひ。やひつー。きっとあたしらなりできるつて!』

「お疲れさまでしたー！ ありがとうございましたー！」

友紀は大声を張り上げながら挨拶をする。その心はとても生き生きとしていた。

今日も頑張ったー……。

住宅街へとつながるドアを開ける。胸の中いっぱいに新鮮な空気が取り込まれて清々しい。すつきりするよ。

「よ、お疲れさん」

「あー、由希もお疲れ。ていうか菖蒲谷さん」

「じゃ、オレも。コウさんお疲れ様です」

「やめろー」

友紀を外で待ち構えていたのは、先程演つていたアニメ『月極』^やの主人公を演じている中村由希。同じ学校に通い、同時に寮のルームメイトである

そんな彼と収録現場初めて会つたのは、『月極』の第一話の収録の時であつた。

クーラーの止まった室内。他の共演者によつてどんどん台詞が進んでいる中、ヒロイン、雪見霜役 性別不詳の現役高校生ユウは椅子にかけて息を殺していた。心臓がバクバクなつて、落ち着かない。

ユウは色んな人に目を向けるが、やはり一番気になるのが主人公役の人。

主人公の七夕涼役の、菖蒲谷太郎。すぐれたルックスを持ちながら、学業優先だからとモデルの仕事は断つて現役高校生。私立の全寮制男子高、橘成学院の生徒。本名は菖蒲谷太郎ではなく、中村由希。いつもユウキ呼んでるし。

ユウが本名非公開の、彼の名前を知っているのには理由があった。同じ学校、学年、同じ部屋のルームメイト。であるからだ。

入学当時に感じていた、いつ自分の秘密がバレるかドキドキして仕方ない気持ちもとっくに慣れたものだつたが、今ここで再び感じることになるとは。

自分が、普段から男役をやつている、性別不詳でない声優だったらどれだけよかつたか。

ユウ 本名中村友紀 は、とにかくハラハラしていた。

簡潔に言えば、友紀は女である。……纏めすぎた気がする。友紀は女で、色々事情があつて男子高に通つてて、だからこんな、性別不詳でどんな役でもこなす声優だと知られるのは避けたかった。女役やつたら、今にも自分が女だとバレてしまつ気がしてならなくなれる。だというのにヒロイン役。しかもあつちは主人公！ もう心臓が爆発しそうである。

周りの共演者が立ち上がり、ボーッとしていたと慌てて立ちあがる。友紀は、なんとなく初日からダメな気がした。

あーもうどうしようどうしよう！ もうどうしよう！

か考えられない！

「始め！」

監督の声を聞いて背筋をまっすぐ伸ばして心を切り替えた。僕は声優、僕は声優！

収録前に音声なしで流れた動画。それに合わせて声を充てればいい。いつも通りやればいい。たとえ、隣に由希がいて、気になつてチラチラ見てしまつて、そしたら目線が合つた。友紀は慌てて目をそらして台本を凝視する。

主人公が、ヒロインに初めて会うシーン。

町に引っ越してきたばかりの涼が川を散歩していたら、霜が渡り石を滑つて川に落下。

『あ！』

霜はその瞬間を男の子に見られてたのを知つて、涼は何をすればいいのかわからなくなつて、お互いの顔を見つめ合つてしまつ。

『え、えーっと、大丈夫、ですか？』

『え、あ、は、はい、大丈夫です！　あ、あははは！　じゃ、じやあ！』

一人して固まつてたために、霜は川に入りっぱなし。涼に声をかけられて意識が戻つて、もう何がなんだかで恥ずかしくなつて、一眼散に走り去つていく。そんな初対面。

監督から注意されないことは問題ないんだろう。よかつた……。シーンはまだ続いてるけど、もつ僕の出番はない。周りの共演者に合わせて台本を捲るだけ。

そうやつてその日の収録を終わらせた友紀は、ふうっと息をはいた。しかしそうして問題はある。由希のことについてだ。

友紀がちらつと由希を見れば、あちらもこちらを見ている。やきほどと同じ展開だと感じつつも慌てて視線を逸らそうとしたが、声をかけられたお陰でそれはできなかつた。

「なあ、挨拶したとき聞けなかつたけど……だよな？　お前だよな？」

小声で質問される。女だよな、などといつ質問が来なかつたことに友紀は安堵した。

「やうだよ。そういう君は、だろ?」

お互に本名を出さないよう質問する。大体、すでに一年以上の付き合いがあるのだ。そして、中村友紀といつ中村由希といつ、読み方によつては同じ名前になることにより親近感を覚え、気が合はないわけでもないから、ルームメイトとしてとても仲良くなつていた。

「にしても、女役すげえな。どうやつて出しちゃんだ? むか昔こいつ男が出る声だとは思えねえぜ」

茶化すよつに喋る由希に友紀はホッとする。

普通に男だつて思われてる。よしよし。ま、確かに普通はあんな声出ないしね。

「生まれつきだよ。でも、つむ菖蒲谷もすじこよ。つまいし、顔面偏差値高えし」

本音だつた。別に嫌みとかは含めてないつもりだ。モデルやつてみないかと誘われるぐらいだし、実際友紀が見ていてもかなりカッコいいと思う。そして由希のことをいつものように呼びそつになつて変な呼び方しちやつたよ。危ない危ない。一応収録現場である。人の本名を晒してはいかん。友紀も昔はかわいいと自覚するほどだつたが……その前に今の友紀はテブ、である。しかも、性別がわからなくなるぐらいの。まあそれで男子高にいれるのだが。

「いやいや。ていうかお前、最近瘦せてきたよな」

「うん。卒業するときまでに普通の体型になるつもりだよ」

元々、友紀は勉強がしたくなくて太つてしまつたのだ。食べていれば、親に勉強しろとは言われなかつたから。寮生活になつてからはそんなこともできなくなつたし、何事も男子に合わせているので色々辛い。一年経てば、それが伴つてある程度は瘦せていた。

「んじや、帰るか」

「そうだね」

「「お疲れさまでしたー！」」

そして同じようにお疲れ様でしたと返される。うん、仕事終わり！
そうやって、始めはドキドキハラハラだった『月極』の最初の収録は、意外となんにも起きずに終わらせることができたのだ。
それと、お互いの秘密を共有することで、友紀と由希はより仲良くなることができた。まあそれと同時に、自分の秘密がバレやすくなつたということにもなるのだが。

トモキとコウキ

学校に着いたころには空は赤く染まっていた。キレイな夕焼けに感動を覚えるとか、そういうのはないけれどキレイだと思つ。いや

「……太陽が沈んでくー。」

「あら、お帰り。今日も仲良しねえ」

ガハハハッと効果音のつきそうな声で出迎えるのは寮母さん。同時に僕の親戚でもある。

……にしても、考え方をするときに僕、か。すつじに慣れてきたな。

元々友紀が、何かでヘマを起こさないようにするために、心の中でも自分の事を僕と考えるようにしていた。そしてそれがしつかり定着していたのだ。いいことではあるのだが。

「ただいまー」「ただいまっすー！」

寮母さんに軽く手をあげて通り過ぎる。別に無視したわけではない。入口に座つてただけだしね。

「二人とも、バイトだつたんですか？」

部屋に入ろうとすれば、丁度向かい側の部屋から林太(じんた)が出てきた。高校一年生だと言うのにまだ声変わりは来ておらず、体も色白。ガリガリで、ひょろひょろしていて今にも倒れそうである。前髪は伸び放題、顔は正に薄幸の少年。身長も、一応女である友紀より十センチ低い、百五十八センチであった。

「まあね。林太、今から何するの？」

「あ、ボクはご飯食べに行こうと思つてました。コウキ君とトモキ君は？」

コウキ、というのは友紀のことではない。由希のことである。そしてトモキというのが友紀のことであった。

少し一人の名前について整理しておこう。入学式で仲良くなり、由希の名前を見てコウキと読んでしまった人がいる。そう、読んで

しまったのだ。由希の名前はユウキではなくヨシキだつたりする。そして名前を呼ばれ、「ああ俺の事指してんだな」と思い反応したところ、そのままコウキが定着してしまった。

友紀に関しては、その友達と共に自分の部屋を確かめに来た由希達がルームメイトを見れば、そこに書いてあるのはユウキと読む可能性のある字。まあよくある名前だし、まさかの同姓同名もどきのルームメイトか、と話を盛り上がらせていたところ、丁度友紀が部屋に。でもやはりひらがなだと同じつて不便だよね、と考えた友達が

「中村、トモキ？」

と質問。友紀は友紀で自分の事指してるんだと判断して首を縦に振る。そしてそのまま同じようにトモキと定着した。という、とてもややこしい話がある。

それにより、友紀は由希をユウキ、由希は友紀をトモキだと勘違いしているという、これまたややこしいルームメイト関係が出来てるだなんて本人達も知らない。

「僕も行こうかな。由希は？」

「あー、んじゃ俺も行くか！」

「日野は誘わなくていいの？ それとも仕事？ 大変だよねー」

林太のルームメイトを誘わないのもどうだか。

「ええ、仕事だそうで。九時には帰ってくるそうです」

……流石である。友紀は素直に日野に感心した。いやはや、遅くまでお疲れ様だ。

林太のルームメイトである日野は、歌手である。一年前にデビューして、三か月に一回CDを出す。そんな感じの人気歌手。ルックスも悪くないし、もちろん歌も上手い。

あれ、でも待てよ？ それなら由希も似たようなもんじゃないか？

二年前にデビュー、最初は脇役が多いもののどんどん主人公系。ワンクールに必ず一回は出ているし、キャラソンだつて出している。顔面偏差値高い。……すごいな。

「じゃあ寮母さんに言わねえとな」

午後九時以降に帰宅予定、または帰宅可能性がある場合は寮母に連絡すること。友達に伝言を頼んでもよし。これはこの学院のルールである。

「そういえば、ステイプラの次のオープニング、田野が歌うんだってよ」

「え、なんだ？」

「マジマジ」

ステイプラというのは、週刊少年ジャンケンの連載漫画。アニメは三年目に突入した人気漫画である。矛盾の少ないストーリーが人気で、かくいう友紀も、連載当初からずっと見ている好きな作品だつた。

「そういえば、えーと……。振り子時計だった気が……」

「何がだ？」

「その曲のタイトルですよ。丁度昨日言つてました。」

「……それ、言つていいの？」

友紀が指摘すれば、もう林太は大慌てである。あわわわわ、と声が聞こえてくるぐらいだ。まあ悪気があつたわけじゃないしいんだろうけど。

「ステイプラだと、僕は家富爺さんが好きです。たまにしか出できませんでしたけど」

「へー。こりやまたマニアックな」

いや、マニアックではないのかもしれない。だが、認めたくなかった。いや、認めたくないわけじゃないが、少し照れくさい。家富爺さんは友紀の役で、こつ、面と向かつて言われると、ちょっと。由希がニヤニヤと友紀を見るので、足を後ろに回してひっかけた。「でも結構人気なんですよ？あ、あとモヒも好きですね。」

友紀はすかさずニヤニヤし返した。そのニヤニヤに、照れくさいのが入っているのは本人も承知の上である。林太は無意識に褒めすぎである。

言つまでのことではないが、そうなのだ。由希は準レギュラーのモヒ役を演じている。

林太は二人の間でそんなやりとりが行われてるのも知らず、急につまずいた由希を見ては頭にハテナを浮かべた。廊下にはつまずく材料などないから。

「寮母さん、日野君、九時に帰つてきます」

「はいはい、わかつたよ。健康には気をつけるんだよつて言つとくんだよ」

はい、と答えて、慣れてしまつたそのやり取りに林太は少し、何故か胸が痛んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8098t/>

男の子の格好と声のお仕事

2011年6月4日17時10分発行